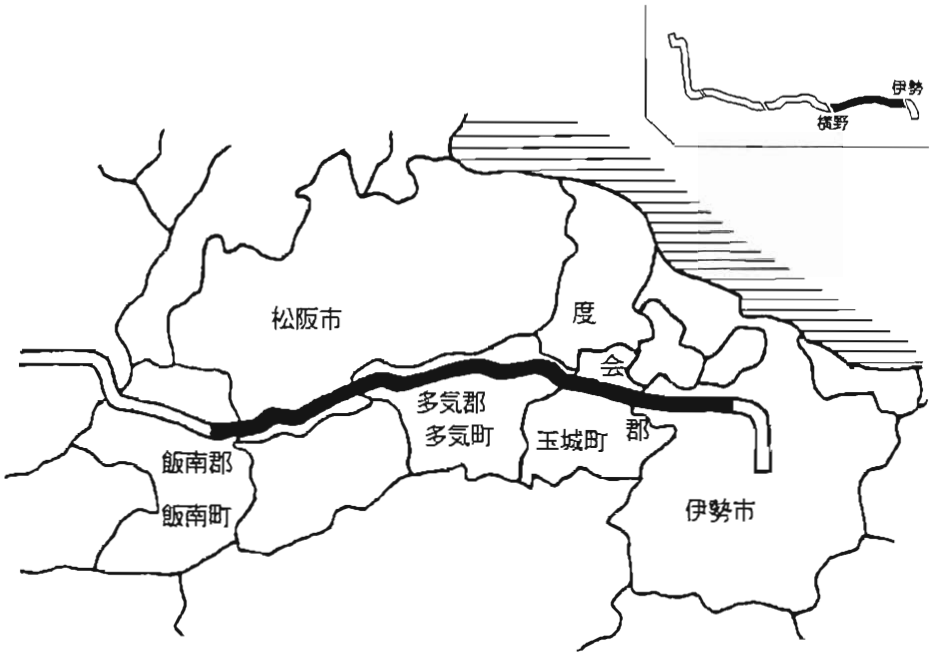
4日目

飯南郡飯南町横野 ～ 伊勢市吹上町(伊勢市駅前)　約34.2km

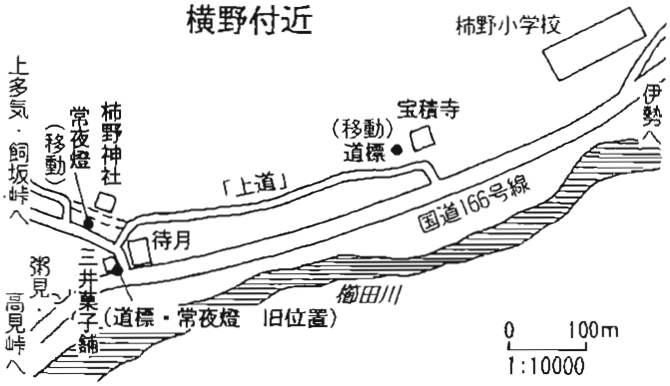
横野（待月）－　深野　－　大石　－　小片野　－　上茅原　－
下茅原　－　津留橋　－　津留　－　牧　－　井内林　－　三疋田　－
四疋田　－　相可　－　西池上　－　東池上　－　土羽茶屋　－　田丸
－　湯田野　－　川端　－　度会橋　－　中島町　－　辻久留町　－
筋向橋　－　八日市場町　－　本町　－　吹上一丁目（日の出館）



4日目はいよいよ伊勢入りである。2・3日目とはうってかわり、平坦なコースに終始するが、峠を越えることに当座の目標を置いて歩いてきた者は、その目標を失ってとまどう。メリハリのない単調な道は、集中力を失ったものにはかえってつらく、結果として「戦う相手は自分自身」という者も多くなる。また伊勢が近すぎるがためか、地元の人々に聞いても道の新旧がはっきりしない部分が増えてくる。どちらも、一種の中だるみ状態といえるかも知れない。

横 野

旅館待月を出発する。昨日来た道を少し逆行し、柿野神社東側から右の旧道に入る。宝来講では、第1回(1986)で国道を通ったが、第2回(1987)以降、この道（『飯南町史』では「上道」と呼称）を通行してきた。しかし、柿野神社付近の道の状況や、道標・常夜燈の原位置（待月の西向かい、三井菓子舗の角）からすると、上道を旧街道とするには若干の疑問を残す。柿野小学校前までは、現在の国道が旧街道である可能性も捨て切れない。



『飯南町史』と『歴史の道調査報告書（三重県）』は、ともに「上道」を旧街道とし、町史では現国道を「明治20年代の開通」としている。しかし地元の人々の間でも、上道を旧道とする説、現国道を旧道とする説の両方がみられる。さらに聞き取り調査では「町史などが“上道”とする道は“中道”で、本当の“上道”は“山麓線”という別の道」という説も飛び出した。この説では、現国道を「下道」と呼称している。いずれにせよ、町史や報告書が断言する内容を、沿道の人々は記憶していないのである。はたして町史は信用できるのかとの疑問を禁じえない。

大まかにいって、地元の記憶は「上の道（町史がいう「上道」）は伊勢湾台風（昭和34、1959）以後の整備でできたもので、それまでは農道様のかなり細い道だった」ということ、「現国道も伊勢湾台風までは現在の半分程度の幅であり、災害復旧・堤防構築を機に両側の家が等分に後退して用地を確保し、現在の状態になった」ということ、の二つに集約される。これより以前の状態についての記憶は人によってまちまちで、確実性を欠くように思われる。

一方、新道とされる現国道沿いの元旅館「仁柿屋」（青木家）の話では、近世末期には現在地に居住していたことが確実であり、当時は「馬方」をしていたという。街道を活動の場とする運送業は、街道沿いにあるのが自然な職業である。「新道明治20年代開通説」は旗色が悪い。

これに、柿野中学校跡から柿野神社までの旧道(107頁参照)との関連を加えると、さらにその感は強くなる。この道は町民センター裏から柿野神社正面へ回って表道と合流、三井薬房東側、ちょうど待月裏手の三叉路から上道に出ている。上道が旧道なら、この三叉路が本街道と和歌山街道の分岐点になるはずである。また、神社の境内を貫通するルートも旧道であった可能性がある。西側から境内に入るスロープがあり、これに従って進むと、手水舎の前を通って参道を横断し、奉賛者名札と社務所の間を抜けて上道に出る(地図中破線の道)。神社の主要部分は、まるで線を引いたようにこのルート北側に収まっている。この想定が正しいとすれば、分岐点は社務所東側になる。いずれにせよ、上道が旧道なら、分岐点を示す道標はこの両地点のどちらかになければならない。しかし現実に道標・常夜燈があったのは、三井菓子舗の角である。当然、ここが本街道と和歌山街道の分岐点ということになるはずで、上道を旧道とする説とは矛盾する。

こうした点からみて、いずれが旧街道とは簡単に判断できないものの、近世末期、すでに現国道のルートが街道として利用されていた可能性が非常に高い。上道は近世のうちに使命を終えてしまった旧道ではないのだろうか。三井菓子舗角にあった道標については、同地から現在地（宝積寺境内）への移転の遙か以前に、人々の記憶に残っていない「一度目の移転」があったのか、それともこの道標が建立された天明頃には、すでに上道の役目が終わっていて、最初から三井の角に建てられたのか。断言する材料を欠くのは残念だが、この二つの可能性を提示しておきたい。

待月裏からの「上道」は、国道沿いの家並を見下ろすような高さで進む。商店はなく、一見農道風である。右手には櫛田川が望める。流れの所々に奇岩があり、美しい。待月から約500m、左手に宝

積寺があり、境内には「旧道探索」の鍵を握る件の道標が移設・保管されている。天明2年(1782)銘で、伊勢、初瀬、紀州・吉野への文字が刻まれている。「上道」は突き当たりを右折し、坂を下って国道に合流する。

さらに200m進むと、柿野小学校前から左手に上がる旧道がある。ここもまた、国道を一階とすれば、二階に当たる高さの道である。所々に右側の国道へ下るごく細い道が付いている。国道沿いの建物は、拡幅などのため往時の姿を留めたものは少ないが、この区間は落ち着いた家並が見られる。約400mでゆるやかな坂を下り、国道166号線と合流する。国道歩きは、往来の車に神経を使うせいもあって疲れるが、この付近は徐々に拡幅工事が進められて、以前より歩きやすくなった。

国道に合流して150mほどで、俊光橋（風呂屋川）を渡るが、この橋の前後は道が北側へ広がっており、以前の橋の痕跡を残す。旧道跡と思われるところに緑地帯があり、「石尊大権現」を示す道標と、旧橋の欄干の一部が保存されている。「石尊」は、この4kmほど北方にある白猪山(820m）のことで、ここはその登山道入口にあたっている。

さらに進むと、右手に見えてくる赤いアーチ橋が深野大橋。この前で国道は左へカーブして、町並の山側へ回り込んでいる。旧道はここを直進して家並の中に入り、国道から離れる。しばらくは町場的な家並が続くが、所々耕地も見え始める。

大石・小片野

旧道に入って約150m行くと、小さな水路がある。これが飯南町と松阪市の境で、桜井以来久々の「市」に入る。約400m進むと左側に庚申堂があり、その前の石垣には「大石宿　これより宮川へ七里　はせへ十五里半」と刻まれた道標が埋め込まれている。道標には様々な形態があるが、このように石垣に埋め込まれたものは大変珍しい。近世初期の旧道は、庚申堂の裏へ抜けて現在の国道付近に出ていたらしいが、現在は細道となりはっきりしない。

庚申堂から約100m先で国道に出てこれを横断する。国道の反対側に続く旧道の先端は、現在の国道より若干高くなっている。国道が付くまではゆるい上り坂になっていたものであろう。これを削って国道が付いたため、国道の北側はまるで町並のカットモデルである。国道からは横野側・松阪側それぞれにスロープが付けられており、これを上がって旧道に出ると、すぐ左側にテニスコートがある。このテニスコートが大石宿本陣の跡だが、現在は建造物がなく、約200坪という広い敷地以外には面影を残すものはない。

ゆるい右カーブを切りながら100mほど進むと矢下川を渡る。この付近が高札場であったらしい。約150m行くと火の見櫓が立っており、この手前を斜め左に入る細い道がある。こちらが旧道であろう。直線状の新道に対して、三角形の二辺をまわるように家数軒分を迂回して、約20mで合流、すぐ

沿道のまち⑩　松阪市（三重県）　人口120,439 所帯数 39,392　面積209.63㎢

〔沿革〕明治22年、松阪町成立。合併を繰り返し昭和8年市制。さらに合併を進め今日の市域となる。

〔概況〕北東は伊勢湾、西は一志郡の山間地にまで至る広大な市域。その大半は山林や耕地で、都市部は市域海寄りの旧松坂城下付近に集中する。この地域を鉄道や道路が幾本も貫通。海岸部には工業地域も。

〔街道〕江戸・四日市方面からの伊勢参宮街道が、市域海寄りを貫通。これに和歌山街道や熊野街道などが城下で合流し、大きな賑わいを見せた。しかし伊勢本街道は、市域の南端をほんの少しかすめるだけ。和歌山街道と合して当市域に入り、小片野でこれと分かれて津留で多気町へ。宝来講もこのコースである。

先で今度は国道と合流する。

国道に合流すると、右にカーブした道の前方に大石不動院が見えてくる。道の右側は相変わらず櫛田川、左側はかなり急傾斜の山が続く。約400mで左手の崖が多少奥へ下がり、不動院があらわれる。正しくは真言宗金常寺といい、旧道はこの不動院のすぐ下を通っていた。現在は境内の一部に取り込まれており、不動滝の付近のほかは道を見分けることができない。境内入口に建っている自然石の常夜燈は、大石の高札場付近にあったものだという。境内を東へ抜けていくと焙烙岩があり、天然記念物のムカデラン群落がある。ムカデランはラン科ムカデラン属の多年草で、暖地の日当たりのよい岩や木に着生する。花期は6～8月で、宝来講とは縁がない。

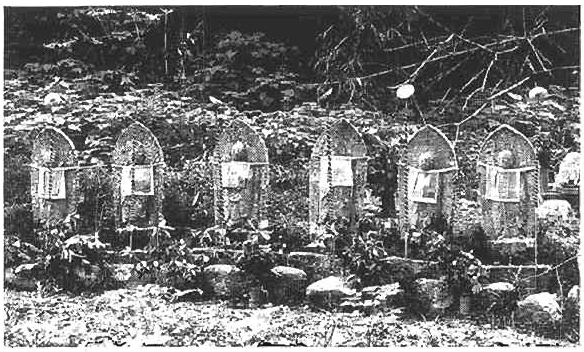
さらに進むと、近年架け替えられた波多瀬橋が右手に見え、その約30m先左手には大石神社の登り口がある。ここより約200mで左側の山が離れはじめ、ここまでとは景観が一変して「小盆地」風となる。この小盆地入口のY字路で国道を離れ、右の旧道に入る。国道と旧道にはさまれた部分、広く開けた場所は三重交通の大石バスターミナルである。例年ここで小休止をとっている。ここは昭和39年(1964)まで、三重交通松阪線（旧松阪電鉄、「松電」、松阪～大石間）の終点であったが、三重交通の鉄道部門を近鉄に合併するにあたって、近鉄側が赤字線の整理を要求、廃線となった。第5回宝来講(1989)までは鉄道当時の駅舎と、右書きの駅名表示板が残っていたが、現在では駅舎も改築されて、その面影は残っていない。現在、小片野までの線路跡地は国道166号線、小片野から射和までは県道700号線となっている。廃線跡を国道に転用するまでは、旧街道がほぼそのまま国道になっていたが、現在は古びた国道標識が残るのみである。

大石バスターミナルをあとにしてさらに街道を進んで約400m、小片野町公民館を過ぎると、ゆるやかな左カーブになる。正面に居酒屋「田壺」が見えてくるあたりに変則四叉路があり、これを左斜めに家並の中へ入る。『歴史の道調査報告書』の地図は旧国道を旧街道としているが、これは誤り。集落の中へ入る道のほうが古く、のちに集落を避けて右側の旧国道が付いたものである。集落内を進むと、約300m先に火の見櫓があり、すぐに信号のある交差点で県道（古江小片野線）を横断、直進するとまた国道と交差し、この北側へ渡る。徐々に右へカーブを切りながら約300m進むと、再び国道と交差する。横切った先の左側が小さな植え込みのようになっており、文化9年(1812)正月銘の道標「左，松坂道　右いせみち　左きしうやまと道」が立っている。ここが伊勢方面（伊勢本街道）と松阪方面（和歌山街道）の分岐点となる。

上茅原

道標より約100m進むと右手に「パチンコ123」があり、この前を抜けてつきあたりを右折する。つきあたりの手前、左側角には、光背に「山田六里観照（欠損）三里辨應」と刻まれた地蔵がある。これまで伊勢を示す地名表示は、「いせ」か「宮川」であった。「山田」という表示のされかたは珍しい。伊勢の町は、外宮の門前町・山田と内宮の門前町・宇治に分かれるが、両者は5kmほど離れているため、距離を表示するときは「宮川」を使う例が多い。

この地蔵道標前を過ぎるとすぐ、松電の廃線跡を拡幅した県道と十字路になっている。これを左折、道はいかにも電車が走っていたような、ゆるやかな登り坂となり、低い峠を越える。旧街道と廃線跡



六地蔵

整然と並ぶ六地蔵は“六道業苦からの救済”を意味している。地蔵尊は六道輪廻の輪のなかで苦しむ衆生を救うため、六道それぞれにあらわれる。その種類については宗派によって異なるらしいが、“境”の神、“塞え”の神という意味合いをふくむことにはどれもかわりはない。地蔵尊は円頂衲衣の僧形で、右手に錫杖・左手に如意宝珠を持つが、一見僧侶の旅姿にも見える。人里を離れ草むす道を急ぐ旅人は、その見なれた姿に安堵し、さらなる安全と守護を祈願したのであろう。

が合流するのは1日目の黒崎（奈良県桜井市）付近と同じ理由で、拡幅の折りに旧道から廃線跡までの最大幅をとった結果である。現在の県道の左側に、所々広くなったところがあるが、これが本来の旧道であろう。桜峠（奈良県宇陀郡御杖村）西側の状況とも似ている。

峠より約200m先の左側に、道より一段高く石垣が築いてあり、皿まわしをしている六地蔵が並んでいる。茅原（ちはら）村の西端を守る地蔵であろう（㊙）。

六地蔵を過ぎると、約100mで「茅原（上）町」の標識がある。右にカーブを描く県道を離れて、直進側の旧道に入る。

茅原はかつて「茅原田（ちはらだ）」と呼ばれていた。現在も神社などに茅原田の名を残している。上茅原の集落に入り、六呂木（ろくろぎ）川を渡るとすぐ左手に、故陸軍歩兵一等卒板谷已之助碑がある。土地の人によると、昔は陸軍記念日などの時に、皆で参拝していたそうである。

その向かい側、道の右手の家の角には、延命地蔵を彫出した小さな道標が建っており、かつては常夜燈もあった。現在この常夜燈は、集落北側の山裾にある上茅原（かみちはら）神社の前に移設されている。台石の部分には「上茅原田（かみちはらだ）村」と刻まれており、旧村名を伝えている。

ゆるいカーブを繰り返しながら集落内を行く。家並が一度途切れたところで右手の県道を振り返ると、上茅原のバス停が見える。これが松電の上茅原駅跡である。また、集落東端付近の同じく右側にある民家には、壁に波型の模様を描いた外便所があって、道からも見られる。さらに600mほど左手の丘の際を進んで、再び県道と合流する。

下茅原

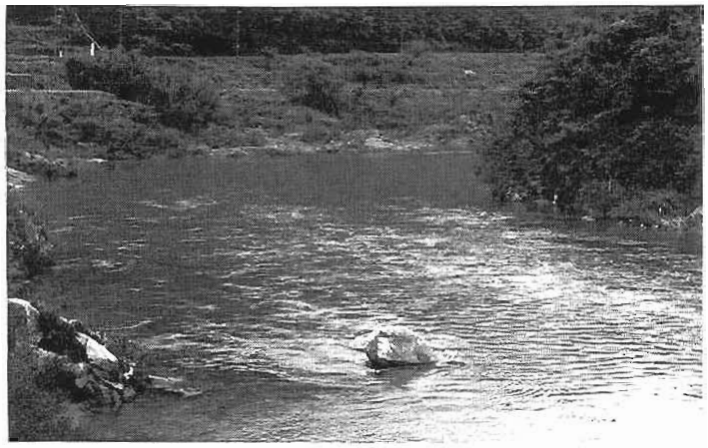
県道の区間は民家も少ない。電車道だったためもあろうか。約400m進み、茅原保育園の前を右の旧道に入ると下茅原（しもちはら）である。松電営業当時は、この茅原保育園付近とこの先の旧大師口（だいしぐち）駅（現下茅原バス停）の手前は、迫った山の直下を、街道と線路が並んで通っていた。当時の写真を見ると、街道と線路の間には柵なども設けられていない。「半路面電車」のような存在だったのであろう。

集落に入り約200m行くと丁字路があり、楠木橋への道が右手へ分岐している。本街道は直進だが、この楠木橋を渡った対岸の茅原公民館前には津留の渡しにあった道標が、また公民館近くの茅原神社には同じく常夜燈が、それぞれ移転保存されている（「津留の渡し場跡」参照）。丁字路を直進するとすぐ、天保14年(1843)銘の常夜灯2基と、貞享3年(1686)銘の庚申塔1基が立っている。常夜灯は

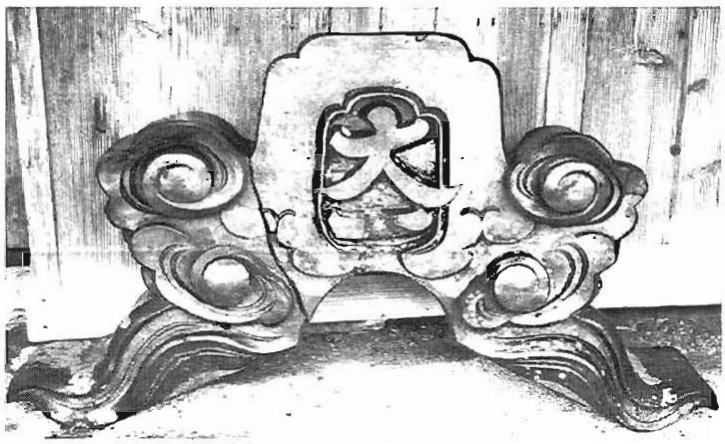
松電営業当時の下茅原付近（「鉄道ファン」254号）

はかり岩
（流れ中央の石）

〔津留の渡し付近〕



渡し場付近にあった道標
（茅原公民館に移転）



参宮接待所の「大一」瓦（若山家で保管）

浅間山と愛宕山のものだが、年代や書体も同一であり、一対のものと考えられる。

横野・待月前からここまで、ずっと櫛田川を右に見て歩いてきたが、この先の津留で櫛田川の右岸に渡り、今度は川を左手に見て歩いていくことになる。常夜燈の付近からは、これから渡る津留橋の全景を見ることができる。

常夜灯を過ぎるとすぐ県道と合流、右に進む。約100mで下茅原バス停である。ここも上茅原と同様、駅跡地を転用しており、大石方面行きの待合所基礎部分は大師口駅当時のものである。この待合所の手前を右折して県道勢和兄国松阪線に入り、すぐのY字路を右にとって赤い津留橋の方に進む。この橋は昭和5年(1930)に架けられたが、それまではここに渡し船があった。俗に、津留の渡しより伊勢まで七里といわれた。

津留の渡し場跡

Y字路を左へ下っていけば、渡し場跡へ出られる。Y字の股にある瓦屋根の廃墟は「参宮接待所」跡で、かつては茶店として営業していた。廃業後も建物は残っていたが、平成3年(1991)6月、惜しくも自然倒壊してしまった。もとはかなり大きな建物だったようだが、昭和34年(1959)の伊勢湾台風で東側半分を流失している。棟には「大一」と浮き彫りした鬼瓦が乗っていた。このうちの1基は、接待所を営んでいた木田家が同所を離れる際、同家の親戚に当たり接待所向かい側に住む若山家が引き取って保管、もう1基は松阪市歴史民俗資料館が保管している。

さらに進むと、道は左へカーブしていき、川と平行になる。左側に大きな六字名号碑が建っているが、この前が渡し場の跡である。ここから川の流れの際まで下りる石段が付いていたが、やはり伊勢湾台風で流失したという。また以前は「右さんくう　左まつさか道」を示す道標がこの石段の口に立ち、接待所の渡し寄りには常夜燈があった。先述したが、道標は茅原公民館、常夜燈は茅原神社と、移動先は異なるものの、保存されて健在である。一般に、渡し場の常夜燈は街道沿いのものよりも規模が大きいが、茅原神社に移転した常夜燈も大変堂々としている。

川下側の流れの中に目を転ずると、水位を測ったといわれる「はかり岩」が見える。もとはもう少し大きかったようだが、これも伊勢湾台風で一部が流されて小さくなった。一方、この対岸には兵士記念碑が見えるが、当時の渡し船は、この記念碑の前あたりに着いたという。碑の前からは津留の集落へ上がる道があり、竹林のなかを上ると、集落入口で橋からの道と合流する。

津留

県道へ戻って津留橋（櫛田川）を渡ると津留である。ここで松阪市から多気郡多気町に入る。津留の宿場は、かつて渡し場の前という条件の良さから栄えた。丹生大師（真言宗女人高野山神宮寺、多気郡勢和村丹生）への分岐点としても賑わったが、現在ではその面影はほとんど残っていない。橋から約70m先の四叉路がその丹生大師への分岐点で、直進するのが本街道、右の道が丹生大師へ向かう旧道である。四叉路の右側には道標が2基立っており、手前のものは「右いせ」、先のものは「（欠損）右大師道」を示している。一方、左の道は渡し場へ続いており、下っていけば兵士記念碑の前に出る。もちろん、橋からここまでの県道は橋と同時にできたもので、それ以前ここは三叉路だった。

沿道のまち⑪　多気町（三重県多気郡）　人口 10,040　所帯数 2,505　面積 49.59㎢

〔沿革〕中心の相可は明治22年村として成立。大正8年町制、昭和30年周辺3町村合併で多気町。

〔概況〕稲作や果樹を中心とする農村。町の北端を櫛田川が流れ、ここから南部へ向けて低い丘陵地が連なる。紀勢本線や国道42号、伊勢自動車道など、交通（とくに道路）の便には恵まれている。

〔街道〕町域北端の櫛田川沿いを伊勢本街道がほぼ東西に貫通し、中央部をこれも東西に伊勢南街道が貫いている。これと直交して南北に松阪からの熊野街道が通る。中心集落の相可は、この交点に立地する宿場町である。宝来講は本街道を通り、西端の津留から相可を経て、東の玉城町へ抜ける。

津留の集落から北牧への道は、県道の改修で大部分が旧道化し、一部は通行不能である。丹生道から100m先左側に、社会福祉法人「聖の家」があり、この前が丁字路になっている。右に分岐する県道を行けば、集落の南側でさきほどの旧丹生道と合流する。宝来講ではこの丁字路を直進するが、本来の旧街道は家一軒分この県道を南行し、左側の岡田家前から再び東へ向いて逵井家（理容店）の裏へ抜けていた。この部分はそれぞれの家に取り込まれて、通行不能である。

逵井家東側で県道に出てそのまま斜めに横断、畑の中の切り通しに入るが、この部分も草が多く通行はかなり困難であろう。第6回(1991)までは、ここから伊勢自動車道（近畿自動車道関伊勢線）との交点まで、直線状に改修された県道を通ってきた。しかし、これと縄をなうように「七曲がり」と呼ばれる旧道が残っており、第7回(1992)から、通行可能な部分については旧道を歩くよう変更した。畑の中の道は20mほどで県道と平行に向き直り、森井家（県道に面して洋品店を経営）の裏へ出る。ここからは歩きやすくなるが、すぐ県道に合流してしまう。左に伸びる道の奥には、谷井繊維工業の工場が見えている。旧道はここでセントラル化成の駐車場に入り、一旦その跡を消すが、同社の工場建屋と事務所の間を抜ける細道となって、再び姿をあらわしている。事務所の横を抜けた北側には、六地蔵と墓碑群がある。

牧

六地蔵から約80mで県道を斜めに横断、再び南側に出て上牧の集落に入るが、20mほどで左折する道があり、上牧バス停付近でまた県道に合流する。

100mほど県道を行くと左側に牧泉寺がある。この少し手前から、右側へ下る細い道がある。これが旧道で、石垣を組んだ水場の前を抜け、民家の玄関前に架かる橋の下をくぐる。この水場はいつも涸れることがないといわれ、牧泉寺の「泉」もここに因むという。橋の下から先も、倉庫の裏側と石垣の間に細い道が続いている。ゆるい上り坂を100mほど行くと、右側からのアスファルト舗装路に合流、直進して30mで丁字路に突き当たって左折する。丁字路の手前右側には、「右はせミち　左にうぢ」と刻んだ地蔵光背型道標、菅野村行悦の回国供養碑（「はせより是迄十七里　宮川四り廿［以下土中］」）などが並んでいる。行悦の回国供養碑は、現在確認されている中では東限になる。また他のものが自然石型であったのに対し、これは角柱型である。居村を遠く離れた地への建立であるから、他のものとは石工も異なるのであろう。

道はすぐ県道と交差、北側へ抜けた旧道はゆるい右カーブを描いて、また県道に並行する。人家は途切れ、左側には竹林越しに櫛田川の流れが望める。幅2mほどの道は、一直線の県道とは対照的に細かな曲折を繰り返し、再び人家が並びはじめると中牧である。途中の十字路左側には、地蔵光背型道標がたち「右いせみち　左まつさかみち」を刻む。ここからも櫛田川を渡って松阪へ行く道があったわけである。道標から100mで県道に合流する。この付近は伊勢自動車道の工事用道路がついて大きく変化した。この合流点も、県道に合流したというより、この工事用道路に合流したと言ったほうが印象には近い。

「農興恵水」と彫られた津田用水竣工記念碑が合流点付近に立っている。これを右手に見て直進、伊勢自動車道の下を函型トンネルでくぐる。ここは鍋倉峠と呼ばれた所で、本来は尾根を乗り越す文

字通りの峠だったようだが、昭和6年(1931)に開削されて切り通し道となり、「峠」というには違和感のある姿になっている。最近はまた伊勢自動車道の通過に伴う工事で道幅が大きく拡げられた。両側に高い切り通しがあることは変わらないが、以前ほど険しい印象はない。

これを抜けると北牧(きたまき)である。集落に入ってすぐ、鍬形電気という商店の前に北牧のバス停がある。ここから右側に旧道があり、100mほどですぐ県道に戻る。鍬形公民館を左に見て、鍬形(くわがた)の集落に入る。集落内の旧街道は長期にわたって拡幅工事を続けていたが、平成2年(1990)頃改良が終わり、広広とした二車線になっている。左手の視界には櫛田川が大きく拡がり、ここから1kmばかり、この景色と連れ立っての歩きとなる。集落の南端には不動院があり、境内奥には不動滝がある。街道に面した参道入口には仏足石もあるが、仏足石といわれて思い浮かべる、靴を脱いだような両足揃いのものではなく、角柱の上部に片足のみを彫出したもの。道標に彫られた地蔵などと同じ趣向である。

津田(井内林)

鍬形集落を抜けて東に向きを変え、のんびりと歩いていくと、右手に南勢(なんせい)水道導水ポンプ場が見える。さらに約300m進むと、右側に安永6年(1777)銘の道標が立っており、「左丹生大師道」と刻まれている。ここから丹生峠を越えて、丹生大師へと向かう道である。この道標は第2回(1987)の時には工事で倒されていたが、第3回(1988)では元のように立てられていた。

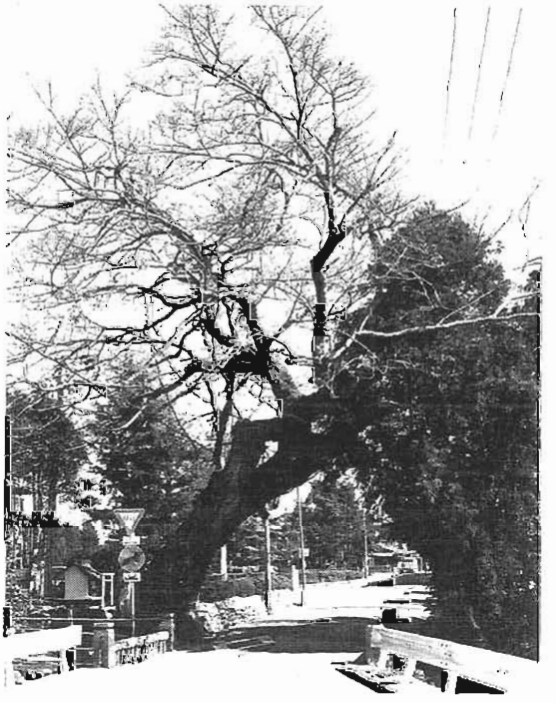
道標より約300m進むと旧津田(つだ)村の井内林(いのうちばやし)集落に入るが、その入口右側に津田村道路元標が立っている。これも初日の朝倉村と同じく町のはずれである。50〜60mほど行くとやはり右側に六字名号碑が立っており、ここからしばらくは家並が続く。100mほど進むと家並が切れて左側が開け、右斜めに分岐している道がある。第6回(1991)まで通行してこなかったが、本来の旧道はこちらである。県道から分かれてすぐは、右手に土手状の法面(のりめん)を見て進み、2〜3軒の家の前を過ぎると、石垣に突き当たって丁字路になっている。これを右へとると石垣に沿って左へ回り込んで行き、また

千鳥ヶ瀬

説明板によると、

> 塞の神は幸の神とも呼ばれ、どの村でもはずれに外からの悪魔退散を願って祀られたものである。明治41年5月に一度相鹿上神社に合祀されたが、近年この付近に火災が頻発し、災禍を恐れた地元民が昭和38年8月再びこの旧地に分霊して町民の平穏無事無病息災を祈願した。一方鎌倉時代の歌聖西行法師は伊勢詣の途中、この地で詠んだとされる
>
> つかれぬる　我を友よふ　千鳥ヶ瀬
> こえてあふがに　たひねこそすれ
>
> という句が残っている。以来この地を千鳥ヶ瀬と称している。

とある。句ではなく歌だと思うが、それはさておき、合祀を進めた神社神道よりも、旧来の信仰の方が強かったということだろう。



東へ向き直る。右側にはロータリー状に整備された築山があって、地蔵と回国供養碑が立ち、松の木が植えられている。この回国供養碑には「六十六部日本廻国供養」と刻まれているが、行悦のものではない。また地蔵は「いぼ地蔵」と呼ばれており、光背には小片野の地蔵道標と同じ「観照辨應」の文字が刻まれている。その上には「阿闍梨」とあるから、これは施主の名なのであろう。

築山を右に見て直進すると、道の両側は水田となる。左側には、県道沿いに建つ津田小学校や幼稚園が見える。築山から200mほど行くと幼稚園東側からの道と交差、50m先の丁字路を左折する。ここには家屋はもちろん、目印となるようなものが何ひとつなく、注意が必要である。何度か曲折を繰り返して、小集落の中を抜けた道は、津田公民館の西側に出て県道に合する。例年休憩をとる多気郡農協津田支所も、この少々西側にある。公共機関の並ぶこのあたりが、旧津田村の中心街であろう。

農協前から東は県道沿いも田園風景となる。津田公民館から約100m先左側、農業倉庫の裏に弧状の畦道があるが、これが旧道。倉庫の東側で県道に戻る。合流点付近は畑に侵食され、幅50cmもない。払戸（一志郡美杉村）の、畑と化した旧道と同類ともいえる。

しばらくは県道を行く。注意深く見れば、道の所々が不自然な拡がりかたをしており、県道改修前の旧道が、必ずしもまっすぐ進んでいなかったことが想像できる。道沿いには人家も多いが、街村や路村といった状態ではなく、まばらな配置である。道の近くを除けば、両側とも田園地帯が広がっている。

約1km先で四疋田集落に入る。集落内を200mほど行くと、右側に弘化2年(1845)銘の常夜灯がある。高さ5mの、台石がしっかりとした常夜灯である。この常夜灯の前から左斜めに入る旧道が残っているが、約200mで再び県道に戻る。

相可

県道に戻ると、行く手に道を覆うような椋の巨木が見えてくる。約200mでその下に到達、その直前に千鳥橋、木の直下には塞神社があり、傍らには「塞神社由来記」と題した説明板（㊟）が立っている。ここが相可の西の入口になるのであろう。

塞神社のすぐ隣が相可高校である。第6回(1991)はちょうど土曜日の昼頃にここを通過したため、下校時間にあたり、高校生が不思議そうな目をして宝来講の集団を眺めていた。

相可は、櫛田川対岸の射和や丹生大師の門前町・丹生とともに、伊勢商人の町として栄えた。その背景には丹生で産出した水銀がある。当時、水銀は白粉や堕胎薬として用いられており、伊勢商人はこの権利をもとに強い経済力を誇った。また、松坂～熊野を連絡する熊野街道が、この町で伊勢本街道と交差しており、交通の要衝として立地条件にも恵まれていた。

相可高校より先は家も増えて街村風の景観となってくる。約400m進むと、右側に「まつかさ餅」の看板がかかる長新本舗があり、その先が丁字路になっている。ここが、通称「相可道標広場」である。小さな広場のように開けた丁字路には、道標2基と井戸があり、「道標広場の由来」という案内板が目に入る。井戸は弘法大師の御杖泉との伝承を残す「相鹿七ツ井戸参之井」であるという。

江戸期にはここは札の辻と呼ばれ、伊勢本街道と熊野街道が交差する交通の要所であった。相可の街をほぼ東西に直進する本街道に対し、道標の角から右に行くのが熊野街道の旧道である。向かって

相可道標広場

伊勢商人の豪邸跡

農協から国道にかけては、伊勢商人、両替商大和屋の邸宅跡。広大な敷地面積があった。農協前の路地を南へ入ると、背の高い「フウ(楓)」の木がそびえている。この木は、本草学者だった11代目当主西村廣休(1816~1889)が植えた2000種の植物のひとつ。フウは台湾・中国西南部が原産地で、日本では野生しないものという(勢瓶による)。伊勢湾台風浸水位の表示板もあり、「地盤から1.2m」のところに、浸水位を示す線が引かれている。

左側の道標がそれを案内している。この道標は以前からこの辻にあって移動していないが、広場が整備されるまでは背後に建物があったので、以前とは印象が異なっている。一方、櫛田川を渡って松阪方面への道は少々分かりにくいが、道標前を行き過ぎてから、多気郡農協相可出張所の手前を左に入れば、旧両郡橋(りょうぐん)橋台の階段が見える。この角の左側が、道標広場右側の道標の原位置である。

宝来講では相可付近で昼食をとることが多く、第4回(1989)には熊野街道旧道を南へ約100m入った長盛寺(ちょうせい)を拝借して昼食にした。第5回(1990)以後は長盛寺に隣接する相可第一区公民館をお借りしており、現在はこれで定着している。

農協前より約50mで国道42号線相可交差点を横切る。射和へ至る現在の両郡橋を左に見て信号を直進すると、すぐ道が食い違った交差点がある。広場状の景観から、現在では「広小路(ひろこうじ)」と通称されている。一見すれば、右奥の道へ進むことは想像がつくが、町並景観としては非常に不自然な印象を受ける。実は、明治20年(1887)までこの広場右側には「越後屋」という遊女屋があり、本街道は鍵の手状になっていた。広場の左側と奥の二辺を進み、旅館「鹿水亭(ろくすい)」玄関の角を左折するのが、当時の道にもっとも近い通り方である。ちなみにこの鹿水亭は、浪花講などの定宿でもあった「車屋金助」の末裔である(『歴史の道調査報告書』)。

家並の続く道を約300m進むと、道の右側、海住家の庭先に「左まつさか道」と刻まれた道標が立っている。越後屋撤去後の広小路に立てられていたものという(『歴史の道調査報告書』)。橋を渡って、庭先に石灯籠のある荒蒔(あらまき)集会所前を過ぎると、家並が途切れて大きく視界が開け、右側からはＪＲ紀勢本線が徐々に寄ってくる。集会所から約400mで県道を離れ、右折して踏切を渡るが、この手前の線路端には石仏があり、光背には「伊勢道」と刻まれている。

踏切を渡り、今度は紀勢本線の線路を左手に見つつ、同線南側に沿って歩く。約300m行くと右手の林の中に水分神社があり、静かなたたずまいを見せている。左手遠方には相可小学校があり、第2回(1987)には校舎から小学生が「がんばりやー」と手を振っていた姿があった。

西池上・東池上

のどかな林の中を進み、再び視界が開けると、佐奈(さな)川に出る。天気のよかった第2回(1987)・第3回(1988)ではこの堤防でのんびりと昼食をとった。

佐奈川にかかる池上橋は、平成5年(1993)正月に拡幅工事が終了し広々となった。これを渡り、信号を越えると西池上集落に入る。約200m先の左側、家の軒先に「金粒丸」「きんりうくわん」と書かれた薬種商の看板が吊るされている。金粒丸は、江戸期に伊勢参りの土産として、朝熊山の「万金丹」と共にもてはやされたものである。現在看板がある家は元の番頭の家であり、看板はもともとここにあったものではなかった。この約150m先左側に、軒に「大好庵」の額があがった古風な建物がある。看板はこの軒に吊るされていたもので、柱には看板を外した跡が残っている。こちらが本家村林家で、北畠氏家老の居城・田村城で薬師奉行を勤めた家筋だったという。

このすぐ先で、防火用水の前のＹ字路を左へ進み、すぐ右に曲がる。そこより約100m進むと、道の左側、元三大師堂の門前に「右いせさんくう　左岩内」と刻まれた道標がある。岩内とは西池上の北東に位置する集落である。また道標の10m先右側には常夜灯が立っている。この常夜燈は笠の部分が円形で、独特の形状をしている。竿や火袋が円柱状の場合は、笠も当然円形だが、角柱タイプのもので笠のみ円形というのは珍しい。

街道はさらに進み、西池上集落を離れ東池上集落に入る。両集落の間には、100mほど家が途絶える部分があり、左側にＪＲ紀勢本線の線路が見える。集落の中にいると気付かないが、左側の水田や線路にくらべ、道は少し高めのところにある。

東池上の集落内を進み、一旦停止標識のある交差点を直進するとＹ字路がある。道の股には小さな植え込みがあり「すぐさんくう道　右とば　かさぎ　の中」と刻まれた道標が立っている。「とば」は鳥羽のことではなく、多気町の土羽をさす。笠木・野中も土羽の南に連なる集落である。野中には伊勢南街道も通っているので、両街道を短絡する道を案内していることにもなる。

この道標の辻を斜め左の道に入って東池上集落を離れる。すぐ踏切が目に入るが、ここまで沿ってきたＪＲ紀勢本線ではなく、多気・伊勢・鳥羽を結ぶＪＲ参宮線である。踏切から左を見ると、彼方に紀勢本線と参宮線の分岐駅、ＪＲ多気駅が見えている。この踏切を渡り、ここからしばらくは、右手にダイヘン（旧称大阪変圧器）伊勢工場の巨大な建物を見ながら歩いていく。

土羽茶屋～朝久田

参宮線踏切を渡ると、さながら「ダイヘン村」といった様相である。道の右側に伊勢工場、左側は独身寮・社宅が並ぶ。ただ、近代化・合理化がよほど進んだ工場なのか、ここで従業員らしき人の姿を見かけたことはまったくなく、寮の入居率も高くないように見える。踏切から約500m進むとダイ

ヘンの変電所があり、この先で左から二車線の広い道が合流するが、すぐにこの道は右にカーブ、旧道は直進する細い道である。もともと直進していた旧道にちょっとご挨拶して、左から右へ横切ったような新道である。旧道入口には案内板が新設されているので、見落とす心配はないだろう。旧道に入って約300m先に集落がある。このあたりは土羽茶屋と呼ばれる。名前から考えると、もともとは土羽を本村とする茶屋集落なのであろう。ここで民家のトイレを拝借し、小休止する。

街道をさらに進むと左手に梅園がある。季節柄満開であることが多く、目を楽しませてくれる。この先は沿道に民家などもなく、林の中をひたすら道なりに歩く。途中にはいくつか分岐する道があるが、いずれも直進側、もしくは角度の浅い側が本街道である。約700m先で砂利道になる。草鞋履きだと石が食い込んで歩きづらい。この区間はほとんど平坦だが、砂利道に入って600mほど行くと、伏拝坂と呼ばれる小さな峠がある。両側に赤土の目立つ切り通しが続き、ごく緩い勾配を上ると、そこが頂上である。左側の切り通しの上には「両宮遙拝所献燈　ふしおかみ坂」と刻まれた石標がある。「献燈」とあるのに灯火の設備がないのは、火袋の部分が昭和19年(1944)の東南海地震で崩壊したためという。裏側には「文政十年丁亥八月坂切リ下ケ」とある。以前は現在の道より上方、おそらくこの石標の付近を通っていたのであろうが、確かな痕跡は残っていない。しかし、切り下げられて放棄された旧峠に石標を建てたとすれば、理解に苦しむ。新しい街道の灯台たるべし、という意図か。それとも石標の建つ旧峠よりさらに旧い峠があったのであろうか。

登りよりは多少角度のきつい坂道を下り、約400m進むと道の左側一面に視界が広がる。広大な田園風景である。これを見ながら行くと、約100m先で朝久田集落の裏側の辻に出て、ここで道はアスファルト舗装になる。この先、外宮神域内まで未舗装の道はなく、本街道としては最後の未舗装部分が終了したわけである。また、この付近が多気町と玉城町の境界になる。

右側前方にあるこんもりとした杜は、内宮の摂社、榊原神社で、街道はその裾を通る。上下二股に分かれているが、すぐ合流するのでどちらを通ってもよい。つきあたりを左折し、コンクリート橋を渡る。100mほどで右折し、広々とした景色のなかをひたすら歩く。

田丸城下

道は水田地帯の中を抜け、また台地上に上がる。まもなく茶屋の集落（大字上田辺）に入る。榊原神社から約700m進むと陸軍兵士碑が4基立っている。その先には常夜燈と鳥居があるが、まわりに祠らしいものは見あたらない。自然信仰か遙拝所であろう。茶屋の集落を抜けると、道路が二車線になる。右手にＪＲ参宮線、左手の少し先に牛尾崎池が見える。

道の右側には、あざやかな赤土の法面が2ヵ所ほどある。道路拡幅工事のときに切り取られてできたものだが、コンクリートを吹きつけるでもなく、また草が生えるでもなく、いずれも赤土を露出さ

沿道のまち⑫　玉城町（三重県度会郡）　人口 13,247　所帯数 3,549　面積 40.95㎢

〔沿革〕中心となる田丸町は明治22年町制で成立。昭和30年に周辺の東外城田村などを合わせ玉城町。

〔概況〕町域中部・北部は沖積低地や丘陵地、南部は山地。いずれも農業を中心とする。中心集落の田丸は南北朝時代からの城下町だが、近世には独立した藩の時代は短く、むしろ宿場として栄えた。

〔街道〕奈良方面からの伊勢本街道と、吉野・和歌山方面からの伊勢南街道が、いずれも西隣の多気町から入って、城下の大手町で合流、一本となって東の伊勢市へ抜ける。ほかに城下から北へ向かい松阪へ至る道もあった。宝来橋は本街道を通り、町域の北・中部をほぼ東西に横断して伊勢市へと抜ける。

田丸・上町にあった地蔵道標
（上町墓地に移転）

大手町にあった道標
（玉城中学校に移転）

せたままである。この付近（大字下田辺）は近世の下田辺村にあたるが『新撰伊勢道中細見記』には「此村の土并に山ともニのこらず赤土也」と記されており、赤土は当時から有名だったようである。宝来講では、力を余した(旅の疲れに錯乱した?)者たちがこの法面を制覇すべく駆け上がるのが、どうしたわけか慣例となっており、この法面を「かけあがりの坂」と通称している。

しばらく歩くと右側に玉城体育センターがある。ここで小休止である。伊勢は目前。実質的には最後の夕暮れを迎え、はやる気持ち、疲れた足、さまざまな想いの出てくるころであろう。

再び出発、街道はさらに進み、突き当たりを右折する。この三叉路には、平成4年(1992)に玉城町が建立した真新しい道標と案内板がある。もともとここには地蔵型の道標があり、これはその再建にあたる。指示地名は元の道標と同じ「はせ」と「松阪」であるが、「阪」がこざと偏になり、形態も単純な角柱型となっている。その意味では「近世道標の復元」や「模造」ではなく、「更新」というか「二代目」というか。地蔵型でないのは、役場が建てる道標としての配慮かも知れない。なお、元の道標はこのすぐ西側の上町墓地に移動している。

三叉路から約100mで十字路がある。この付近が田丸城の北の入口にあたり、枡形があったという。道の左側の空き地がその跡だといわれるが、痕跡ははっきりしない。少し進んで田丸神社下の常夜燈前を左折、田丸の城下、上町通に入る。

田丸は外様大名稲葉家45,700石の藩であった。元和2年(1616)に転封となり廃藩となってのちは、津藩や和歌山藩（松坂領）の支配となった。城下の家数は268軒とされ（享保10年、1725）、伊勢本街道と熊野街道、伊勢南街道（高見峠越）との分岐点という条件の良さから、宿場町としても栄えた。現在でもその町並が残り、街道沿いにも妻入りの屋敷が多く残る。

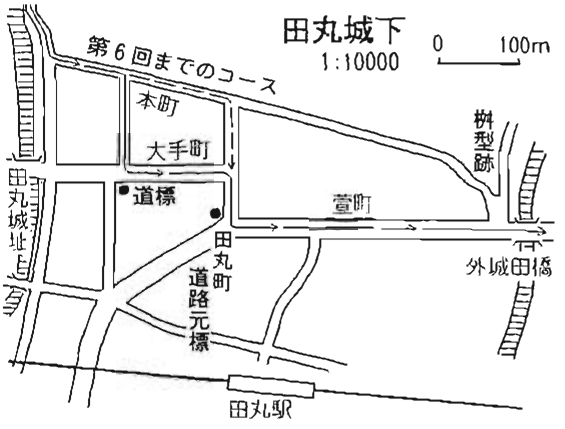
田丸神社石段下の道は、両側に武家屋敷が並んでいたといわれる。城下防禦の意味もこめられていたのであろう。現在は家もまばらにしか建っておらず、往時の面影はない。絵図で見るとこの北側には土塁が築かれているが、現在は雑木が生い茂っている。道の右側、空地の片隅に「紀州藩五十人組

同心屋敷跡」の石標が立っている。形態・建立年月とも、上町の再建道標と同じである。

次の突き当たりの手前を田丸城の堀端へ右折するが、ここから朝熊山が間近に眺望できる。玉城橋を渡り、左折して駐在所北側の道へ入る。浄土宗西光寺前を通り、初めての丁字路を右折、約100m南進すると、大手町通に突き当たる。右は田丸城の大手門に達する道、左折するのが本街道である。この交差点は一見丁字路だが、突き当たりの酒屋倉庫の一軒西側から南に進む道があって変則四叉路になっており、辻の南東角には玉城町による道標が立っている。道標の角から南へ入る道が、野中、丹生、朝柄、粥見を経て高見峠を越える伊勢南街道（紀州街道）である。この角の道標も上町と同様「二代目」で、以前ここにあった道標と同じ内容を刻んでいる。元の道標は現在玉城中学校（田丸城跡内）に移動している。

大手町は、文字通り田丸城の大手門から続く道で、近世には武家屋敷が並んでいた。商店が並ぶ通りを東へ進むと、約200mで本町通りの丁字路に突き当たり、これを右折する。

田丸の城下町内も、考えられるルートがいくつか存在する。ここに掲げた「大手町経由」は『玉城町史』『歴史の道調査報告書』も採用しており、もっとも妥当なものだが、これで確定というほどには強く言い切れるものでもない。



第6回(1991)までの宝来講は大手町通に出ずに、駐在所から二つ目の角を右折、大手町通の東端の丁字路に北側から入るよう歩いてきた。一般に大手筋を街道が通ることは避けられていたためである。さらに伊勢迄歩講案内地図(1980)では、大手町だけでなく萱町も避けており、駐在所角からこの先の外城田橋まで直行するよう示している。これも意味としては同じである。

城下町の中に入った街道は、防衛上さまざまな制約を受ける。縄張の中を通ることは当然できないし、「七曲り」などと呼ばれる大迂回を強いられたりする。「大手筋は通行不可」というのも、そうした規制のひとつである。しかし、城下町繁栄を重視する領主であれば、軍事上の制約より街道の引き込みを優先した例も多い。田丸の場合、大手町にあった道標は明治初期のものと思われるが、現実には近世末期すでに通過旅客も流入してきていたであろう。道標は伊勢南街道（紀州街道）を案内しているが、南街道が可で本街道は不可、ということはあるまい。とすれば、本街道も道標の辻に出ていた可能性が強くなり、これが大手町経由を妥当と考える根拠になる。

本町は、近世から商家や旅籠の並んでいた町である。この丁字路を右折すると、すぐ変則交差点に出る。この傍らに田丸町道路元標があり、また伊勢を示す道路案内標識が初めて出てくる。この交差点を右斜めへ進む道は、大手町を避けてつくられた伊勢南街道の新道である。本街道は交差点を左折して萱町へ入り、あとはほぼ真東へ向かってひたすら直進する。両側の家屋は妻入がかなり多い。

道路元標より約400mで、外城田橋（外城田川）を渡る。古絵図では、この橋の西詰にも枡形が設けられている。現在でも道の左側が大きく広がっており、交差点としてはやや変則的な姿をしている。ここで田丸城下町を出るわけである。

湯田野～川端

玉城郵便局、天理教田丸分教会を通ると、右手に常夜灯がある。広い道を渡り、湯田野の集落を過ぎると、家並が切れて道幅が広がり、倉庫などが並んでいる。ゆるい坂を下った先に外城田川の支流にかかる狭い橋がある。これが玉城町と伊勢市の境界である。ついに「伊勢」に入ったわけだが、ここは合併で市域となったに過ぎず、本当の意味で伊勢に入ったというには、やはり宮川を越えなければならない。

朝熊山が正面に見える。晴れた日なら、このあたりで後方に夕陽が傾いてくる。広々とした風景に冬の夕陽がよく合う場所である。ＪＲ参宮線上地踏切を渡り、県道伊勢多気線を横切る。上地（伊勢市上地町）の集落に入りしばらく行くと、真新しい城田郵便局が右側にあり、前方に火の見櫓と農協の電照看板が見えてくる。火の見櫓の足元には駐在所、左に入れば伊勢農協城田支店があり、ここで小休止する。例年、この付近では列が長くなってくる。踏破４日目も夕方を迎え、各人の体調がさまざまであるためだが、先頭から後尾まで長いときは１㎞以上も開いてしまう。先頭で休憩地に入ったものは、後続を待つうちに身体が冷え、これはこれでつらい。

休憩を切り上げて道に戻ると、左手に城田小学校、右手に城田幼稚園があり、両者を繋ぐように伊勢市上地町と書かれた歩道橋が架かっている。この下をくぐると道は一気に河岸段丘を下って、宮川沿いの平地に出る。汁谷橋（汁谷川）を渡ると、しばらくは広々とした田園風景となる。

500m先で再び集落に入り、さらに400mほどで和合橋（菱川）を渡ると、坂東（伊勢市中須町）である。道の両側に続く民家は、伊勢風の妻入りが非常に多い。家並の中を、道なりに左、右と曲折しつつ進む。一度家並が途切れるが、右手に平澤病院を見て再び家並に入ると、本街道最後の宿場、川端（伊勢市川端町）である。前方、家の隙間から宮川の堤防が見える。さらに道なりに左へ折れて進み、約200m先の丁字路を「外宮へ3.7㎞、内宮へ8.7㎞」の案内標識に従い右折する。正面には宮川の堤防が見える。

宮川・度会橋

道は堤へ出る形でゆるやかな上りとなり、号堂記念館前に至る。号堂とは護憲運動や普選運動に活躍し、憲政の神様とうたわれた尾崎行雄のことである。列は相変わらず長いことが多いが、伊勢の町へは一行揃って入りたいとの思いから、この記念館前で後続を待つようにしている。

記念館前の堤防からは、左手に度会橋が見える。この橋を渡ればいよいよ神宮の神領、山田の町である。宮川は神領へ入るために穢れを流し去る禊の川であったが、近世に入ると、参宮者自身が禊をすることは少なくなり、代垢離と称して参宮人に代わって沐浴をして銭をもらう者がいた。

また、昔からたびたび氾濫を繰り返し、治水工事、堤防修理が行われてきた。近世には山田奉行中川半左衛門忠勝の尽力により、大堤防ができあがったが、その後もたびたび決壊したようで、堤には川を鎮めるために祀られた社が点在している。記念館から約200m上流の掃守社旧地には松井孫右衛門人柱堤が残っている。

江戸時代、宮川には橋がなく、渡し船を利用していた。本街道から山田へ入る渡しを上の渡し、または宮川左岸（川端側）に柳の木が多かったので柳の渡しと呼んでいた。他に北街道（阿保越え）や

東海道からの参宮者を小俣から山田へ渡した下の渡し（桜の渡し）、地元の人が利用した磯の渡しや上条の渡しがあった。

宮川　旧度会橋跡（昭和54年撮影）

渡船場は、川の水量や気象などの条件によって、少しずつ変わっていたため、現在ではその場所を確定するのは難しいが、土地の人によれば、咢堂記念館前あたりということである。記念館前を堤へ出たところには、河原へ下りるスロープが設けられており、よく見ると、石組がなされている。これが渡し場の名残という。ここから、対岸の中島町へ渡していた。また、渡し廃止後、現在の位置に旧国道（現県道）の度会橋が開通するまではここに木橋が架かっていた。昭和55年(1980)ころまでは、その橋脚の跡が切株の如く川面にのぞいていたが、河川改修で撤去されている。

さすがの宝来講も渡しを再現することはできないので、迂回して度会橋を渡っての伊勢市街入りである。渡しの風情を想像しながら、堤防沿いの道を100mほど下流に進み、左手にパチンコ屋を見て度会橋西詰の交差点を右折、いよいよ橋にかかる。陽の落ちかけた夕闇のなかにパチンコ屋のネオンが浮かんでいる。現在の度会橋は、昭和61年(1986)に改修されたもので、橋詰には宇治橋や夫婦岩などのレリーフがはめ込まれており、伊勢の入口といった感じを出している。橋の東詰、北側には「神宮御用材貯木地跡」碑がある。

度会橋を渡ると、右側に料理屋「川十」があり、その角を右折する。100mほどでつきあたり、藤本屋酒店の角を左折するが、本来はつきあたりの右手奥、宮川堤から続く道が旧街道である。山田へ向かう参宮客たちは、現在の咢堂記念館前から渡し船に乗り、こちら岸に上陸、まっすぐこの道に出てきていた。現在も遷宮の際のお木曳車は、宮川からこの道を通って神宮へと向かう。

藤本屋酒店の角を左折すると、すぐ右手に黒壁の立派な土蔵、左手にも崩れかけた土蔵があり、2軒ほどおいて、月極駐車場のある四つ辻に出る。ここが、日永の追分（四日市市）で東海道から分かれ、伊勢湾岸を南下してきた伊勢参宮街道との合流点である。享和・文化年間に幕府によって製作された『伊勢路見取絵図』によると、上の渡しを渡ってきた伊勢参宮街道は、宮川の土手に並行してほぼまっすぐ京町、中島町と南下、中島町で本街道と合流しており、合流点は三叉路に描かれている。現在、この辻は四叉路になっているが、昭和30年(1955)頃までは右手に蔵が建っており、南へ抜ける道はなかったという。よく見ると、南北の道は少し食い違っていて、まっすぐには通っていない。つまり、上の渡しから南下してきた道は、ここで突き当たり、本街道と合流して左へととった。『伊勢路見取絵図二巻下・解説篇』（東京美術 1986）の地図では、両街道の合流場所をこの辻を南へ抜けた県道伊勢南島線との接点としているが、これは誤りである。

下の渡し～中島町の伊勢参宮街道

下の渡しは、小俣と中川原（宮川町）を結んでいたが、渡し場の位置は上の渡し同様、判然としない。宮川橋やＪＲ参宮線鉄橋の少し下流、現在グランドとなっているあたりにあったという説もあるが、確証はない。上の渡しが柳の渡しと呼ばれたのに対し、下の渡しは、山田側に桜の木がたくさんあったことから、桜の渡しと呼ばれていた。現在も宮川橋・度会橋間の右岸には多くの桜があり、桜の名所百選に数えられている。

宮川橋の東詰には、広重の浮世絵「伊勢参宮宮川の渡し」を描いた解説板がある。また、橋の脇から河原へ下りる細い道筋には民家が一軒あり（新川家）、その前に「宮川渡場」「すぐ外宮へ十九丁五十九間、内宮へ二里四丁」と彫られた道標が立っている。しかし、これは新川氏が往時をしのんで建立したもので、昔からの道標はなかったという。

中川原の入口である宮川橋の東詰には常夜燈が立っていた。『伊勢路見取絵図』では渡し場道の両側に２基づつ太神宮常夜燈が描かれており、『伊勢参宮名所図会』にも２基の常夜燈が見える。しかし、戦後まもなく道路の拡張により撤去された。

宮川橋から、しばらく妻入の古い民家が続き、街道らしい風情を呈している。家並はそのままま っすぐ続いているが、これは下の渡しから筋向橋までの近道で、「堤世古道」と呼ばれる道である。茶屋が多く建ち並び、実際はこちらの方が賑わっていたようである。本来の街道は、橋から約100m進んだ丁字路で、ガソリンスタンドの角を右折する。100mほどで急に道幅が広くなり、古い民家はなくなってしまう。ここは松並木があったところで、そのため古い民家は見られない。松並木は、正保４年(1647)この道が開通した際、この付近を支配していた師職榎倉家が参宮者の便を計って植えたという（『宇治山田市史』上巻）。『伊勢路見取絵図』でも、この部分は家並が途切れ、並木が描かれている。現在は路傍に宇治山田市教育委員会によって立てられた「伊勢街道松並木跡」という石標があり、若い松の木が並んでいる。往時の松並木を再現したものであろう。宮川町１丁目に入ると道幅は元に戻り、中島町を経由して500mほどで県道鳥羽松阪線（度会橋東詰）の下をくぐる。中島幼稚園の左を通って、100mほどで上の渡しからの道に合流する。

日の出館　到着

合流点からは『伊勢路見取絵図』と現在の景観を比較しながら進んでみよう。合流するとすぐ、小河橋を渡る。見落としてしまいそうな、溝をまたぐ小橋である。絵図では小太郎ヶ池に源を発する川とされているが、昭和２年(1927)に池は埋め立てられ、川は溝となっている。橋を渡って約200mでバス通りに出る。この交差点は、押しボタン式信号であるが、ボタンを押しても「横断中」という表示が点滅するだけ。車はなかなか止まってくれないので、気をつけて素早く渡らなければならない。交差点を渡り、辻久留（つじくる）町に入ると、道は自然に右へカーブして県道伊勢南島線へ出る。絵図には道の真ん中に井戸が描かれているが、現在は見当たらない。県道を左折し、商店の続く街中を進む。絵図ではこのあたりから御師（おんし）の家が並んでいるが、今は見る影もない。

500mほど県道を進むと筋向（すじかい）橋に至る。道に対し橋が斜めに架かっているため、筋向橋（筋違橋）と呼ばれる。現在は変則四叉路の一道に、嘉永２年(1849)銘の擬宝珠をつけた欄干のみが残されている。橋の下を流れる清（きよ）川は暗渠となり、百五銀行筋向橋支店の裏からわずかに確認できるのみである。また、下の渡しからの近道である堤世（つつみせ）古道とはここで合流していた。以前は百五銀行前に道標があっ

沿道のまち㉝　伊勢市（三重県）　人口102,957　所帯数 33,362　面積179.0 km²

〔沿革〕明治22年、宇治山田町が成立。同39年市制。その後合併を進め、昭和30年伊勢市と改称。

〔概況〕北部は伊勢湾沿いの河口デルタ地帯、それに続いて伊勢神宮を中心とする門前町（外宮：山田・内宮：宇治）が中心的な市街地をなしている。南部は五十鈴川などの源流となる深い山林地である。

〔街道〕宮川を渡って山田の市街地に入ると、伊勢湾岸を南下してきた伊勢参宮街道、大和からの伊勢本街道など、すべての伊勢街道が一本になる。宝来講は、上地町で市域に入り、度会橋で宮川を渡って神領へ。山田市街地・外宮・間の山・宇治と抜けて、内宮宇治橋前に至る。

たというが、存在は定かではない。

筋向橋を渡る格好で、百五銀行角を右へ折れる。相変わらず、道の両側には商店が並んでいる。常盤町を過ぎると、南宮町バス停の右手奥に杜が見える。坂社で、境内には八日市場町の街道沿いから移されてきた道標（「西すぐ右さんくう道 左ふたみ」「南 江戸 大坂 ならはせ大和めくり道 紀州くまの」）がある。

その八日市場町に入る。有文堂書店と宇仁田呉服店の間にある2か所の辻のいずれかが道標の旧位置といわれる。呉服店の東隣が御師福島御塩焼大夫の邸宅跡であるが、現在は民家となり、表に碑と解説板のみが立っている。みさき大夫家は、5ヶ国18万にもおよぶ檀家をもつ大御師であった。現在もとのみさき大夫邸の門は、神宮文庫の門として移築、保存されている。また、みさき大夫邸の道を隔てた向かい側には、小西万金丹舗があり、昔からのたたずまいを残している。伊勢で万金丹といえば、朝熊山の野間家がよく知られているが、小西万金丹舗のほうが古く（延宝4年[1676]創業）、四日市と草津（一説には京都）にも出店があった。店土間には、ついたて屏風が置かれていて、明るいうちは戸を開放しているので表から自由に見ることができる。

度会橋で後続を待ち、一行まとまって歩いていたはずだが、いつの間にかまた列は前後に長くなっている。市街地に入ると信号に遮断されることも増える。疲れている一行にとって、一度切れた列を元に戻すのはかなりつらいため、列を切らないように進むが、それでもやはり列は延びてしまう。

さらに進んでＮＴＴ伊勢営業所の前を過ぎ、400mほどで伊勢市駅前通りに達する。この約400mが、非常に長く感じられる。とくにＮＴＴの営業所は、歩いても歩いても尽きぬ不思議な建物のように思える。日もすっかり暮れ、車のまぶしいライトを浴びながら、最後の力をふりしぼって、ただただ歩く。駅前通りに出ると、その右手前角が第7回(1992)まで宝来講の定宿であった宮前館の跡である。当時の建物はすべて取り壊され、現在は団体観光客向けの記念撮影用写真館「伊勢外宮前スタジオ」となっている。そのさらに奥には、外宮の杜が黒々と見えている。

思い出の宮前館　なつかしい到着シーン

宮前館跡の交差点を直進すると、続いてまた交差点がある。交差点から右前方に広がる大きなロータリー状の広場は三重交通の外宮前停留所。さらに右奥には外宮表参道入口の大常夜燈なども見えるが、この時間にはすでに夜間参拝停止となっており、今はひとまず通過である。この交差点を左折して「神宮参道」に入り、伊勢市駅前の「日の出館」に向かう。

神宮参道はＪＲ・近鉄伊勢市駅と外宮を結ぶ道で、現在も参拝客の大部分がこの道を通っている。奈良の三条通と同様、コミュニティー道路化され、電線の地中埋設なども行われた。三条通のような旧街道ではないので、近世の建築物などは見かけられないが、新しい店舗に混じって老舗の旅館や土産物店などが軒を並べている。なかでも、木造３階建ての旅館「山田館」は、明治の旅館建築を今に伝えてひときわ目を引く。大正時代から高度成長期ごろまでは、同じような木造３階建ての旅館がこの参道沿いに軒を連ねていた。

スクランブル信号のある交差点を過ぎると、両側に高いビル（伊勢市駅前ビル、ジャスコ伊勢店）が建ち、その谷間を行くように進む。はるか上方には、両側のビルを結ぶ渡り廊下があり、「神宮参道」の文字が見える。ビルが途切れて広場に出ると、正面が伊勢市駅である。広場手前の信号を渡って駅舎の前まで直進し、駅舎に突き当たって歩道を右へ曲がると、伊勢市駅の荷物取扱所、つづいてＪＴＢ伊勢支店、そのさらに隣が日の出館。ようやく最後の宿に到着である。

感動の一瞬である。玄関前に全員の顔が揃うと、４日間の長旅に耐えた思いが一気にこみあげ、泣き出す者もいる。明日でこの旅が終わるのかと思うと、寂しいような気がして感涙にむせぶ者もいる。来年もまた来ようと思うのもこの時である。

宝来講定宿帳（其の肆）　伊勢・日の出館

ついに迎えた最後の夜。完全踏破できた人、できなかった人。みんなご苦労さまでした。

さて、「伊勢」の街は、厳密には「宇治」と「山田」に分かれている。宇治は内宮門前町、山田は外宮の門前町で、伊勢市駅や日の出館などは山田の街にある。かつては市の名前も「宇治山田」といった。近鉄の終着駅としてよく耳にする「宇治山田」。この駅名はその名残なのである。

宝来講定宿のなかでは、もっともなじみの薄いのが、この伊勢の定宿「日の出館」である。この宿は、第１回(1986)以来の伊勢での定宿「宮前館」の廃業を受けて、第８回(1992)から定宿として名を連ねることになった。日の出館は明治時代の創業で、当時は「神宮参道」の中ほどにあった。戦後すぐ現在地に移転、しばらく食堂として営業していたが、戦後の混乱が収まるころから旅館営業を復活し、現在に至っている。町割りと線路（ＪＲ参宮線）との三角地に敷地を構えており、表からでは想像がつかないくらい奥に広い建物である。また、バス通りを隔てて正面にある社は、山田産土八社のひとつ、世木神社である。伊勢神宮とは別の次元の神、山田という土地の産土神を祀る社である。

以前の定宿・宮前館は、外宮表御門のすぐ近く、伊勢街道に面して建っていた。ロケーションといい気やすさといい、なんともいえない名旅館であったと思う。残念ながらこの宮前館が平成４年11月末をもって廃業となり、代わりにと、宿のかたに紹介していただいたのが、日の出館である。場所は伊勢市駅前で、宮前館に較べると歩くコースは長くなった。しかし、駅に近づいたため大宴会を襲撃するＯＢが増えるのでは？というウワサもまことしやかに流れている。宴会といえば、日の出館の宴会場が、宮前館の宴会場であった広間によく似ている。酔った頭ではずいぶん混乱した。